

## 6 北薩の昆虫相

今回の対象となっている北薩地域は、屋久島～トカラ～奄美諸島と並ぶ、鹿児島県下では最も変化にとんだ興味深い自然を持つ地域である。したがって、蝶やトンボなど種名の調べ易い昆虫群についてはこれまでに報告された記録は多く、これらにより昆虫からみた本地域の自然に関する特色や問題点を指摘できる。もちろん昆虫類は種類数がきわめて多いので、その他の大部分のグループではこれからの調査に期待するところが大きいですが、現時点での知見は一般化出来るものが少なくないと思われる。

ただ、ここ20～30年間の環境変化は昆虫相にも大きな影響を及ぼし、激減あるいは絶滅した種類も多いと思われ、早急に調査を進めると同時に環境の保護と育成への努力が必要な時代になった。自然の一員としての昆虫からの情報を正しく読みとり、最善の対応が期待される。

本稿ではまず文献および手もとの未発表資料に基づいておもな昆虫類を紹介し、次いで市町別に調査状況、貴重種・希少種についての若干のコメントを付記した。身近な普通種も含めて、人と自然との共存の道を探る情報源として利用していただければ幸いである。

本稿を草するにあたり、カミキリムシなどについてのご教示を得た鹿児島昆虫同好会の森一規氏にお礼申し上げる。

### (1) 昆虫相の概要

北薩地方は昆虫の分布状況から見ると、次のような特色がある。

#### ① 分布南限種が多い。

県内では大隅半島、屋久島、トカラ列島に分布南限種が際だって多いが、北薩の紫尾山、大口の山地、霧島山などにも注目すべき南限種が少なくない。しかも、本地域ではそれらの生息地が陸続きでありあまり広くない“島状のエリア”になっている点に大きな特徴がある。

#### ② 隔離された北方系の残留種が多い。

北薩一帯では山頂部のほか溪流沿いの樹林、草原など孤立した狭い地域に寒冷期時代の残留種が多く生息している。これらは必ずしも分布南限地ではないが、霧島山や大隅山地、屋久島などのそれらと共に貴重な生息環境である。

#### ③ 甌島列島を中心に九州西回り要素の分布北限種がある。

南方系の種でありながら、太平洋側でなく、九州の西側を海流、気流、渡り鳥などによって北上している一群の生物がある。これは最初植物相で指摘されたことであるが、昆虫についてもいづらか認められる。

以上のことを地形的特徴で大別してまとめると次のようになる。

ア 出水平野－河川・湖沼・湿地に、熊本県西部低地にも見られる種が分布南限として生息している。アブラボテ（魚類）、カスミサンショウウオ（両生類）のような熊本県平野部とつながるような種の分布南限地となっている。昆虫類ではまだそのような例は発見されていないが、オオムラサキがその例に近い。水生昆虫などに期待がもてる。

イ 出水山地－紫尾山のブナ帯に温帯性の種が残留・隔離分布して分布南限となっている（エゾハルゼミなど）。照葉樹林帯にも同様な傾向がある（スギタニルリシジミなど）。

ウ 国見山地と伊佐盆地－熊本県との県境に連なる照葉樹林に九州山地にも産する北方系の種が

分布南限として生息している（オオムラサキなど）。溪流や古い湖沼にも同じ傾向がみられる。

エ 霧島山北西部—温帯林（ブナ・カシワ林など）と草原に北方系の種が残存し分布南限となっている。照葉樹林（タブを含む原生林）にもその期待がもてる。

オ 川内川流域—低山地や人里に北方系種の生息地が点在するが、タテハモドキのような南方種も進出している。

カ 甕島と長島—甕島列島に九州西部系の分布南限種（クロツバメシジミなど）と九州西回り要素の分布北限種が見られる。

## (2) 本地域の注目すべき昆虫類

### ① トンボ類

#### イトトンボ科

ベニイトトンボ—やや大きめの全身が赤いイトトンボ。野田町の八幡池（1963年）、栗野町の丸池（1974～1977年）が産地であったが、池の改造で絶滅。他には、東郷町南瀬（1987年）に近似種のリュウキュウベニイトトンボと混生している産地がある（分布南限）。本県では南方系のリュウキュウベニイトトンボの方が普通で、北薩でも海岸付近の平野部の池などに多い。ベニイトトンボはもともと北方系の種で、九州では産地が少ない。両種はよく似ているので注意が必要。

#### モノサシトンボ科

ゲンバイトンボ—モノサシトンボに似るがオスは白い軍配状の特異な肢を持つ。全国的にも産地は限られ、九州では他に佐賀、大分、宮崎に産地が点在するのみ。1985年に大口市の井立田川沿いの猩々と芳ヶ野で発見され、現在県内では唯一の産地である（分布南限）。生息を維持するためには、水質の汚染防止や、川岸の植生など生息環境を守る手だてが必要。（口絵参照）

#### アオイトトンボ科

アオイトトンボ—体が金属緑色をした大きめのイトトンボ。北方系の種で、九州でも産地は少ない。1977年下甕島の寺家の池で発見されたのが、県内初めての記録。しかし、当地でのその後の追記録はない。1981年に宮之城町内の早谷池など3つの池で多産地が発見されたが、池の回りの環境が整備されたせい、産地発見以降に個体数が減り、1987年の1♂の記録を最後にその後の記録はない。その後吉松町沢原でも産地が見つかり、現在唯一の産地となっている（分布南限）。（写真1参照）

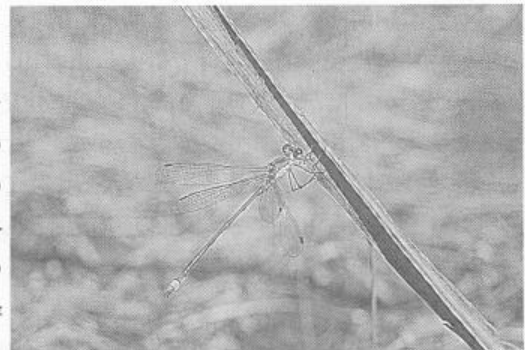


写真1 アオイトトンボ（♂）（吉松町）

#### カワトンボ科

アオハグトンボ—羽の黒いハグロトンボに似るが、メスの偽縁紋が白いのが特徴。ハグロトンボは各地に普通に見られるが、本種の産地は全国的に少ない。北薩では栗野町（1958, 1963年）、大口市轟（1960年）、牧園町金山川（1964年）などの古い記録があるのみ。現在県下での確実な産地は知られておらず、特に北薩では河川の中流付近の水生植物の多い清流を調査してみる必要がある。

オオカワトンボ—河川の中・上流に多く見られるニシカワトンボよりひとまわり大きなカワトン

ボ。北薩では、牧園町（1974年）で橙色型1♀の記録があるのみ。現在県下での確実な産地は知られておらず、九州でも産地は少ない。

#### ムカシトンボ科

ムカシトンボー中生代に栄えたトンボの仲間「生きた化石」として有名なトンボ。この仲間は世界で日本とヒマラヤだけにすむ。北薩では霧島山（1953年）、紫尾山（1957、1975年）、出水市（1961年）、大口市（1986年）などで記録がある。山間部の溪流にすみ、森林伐採などの環境変化の影響を受けやすいので生息維持には注意が必要。（写真2参照）

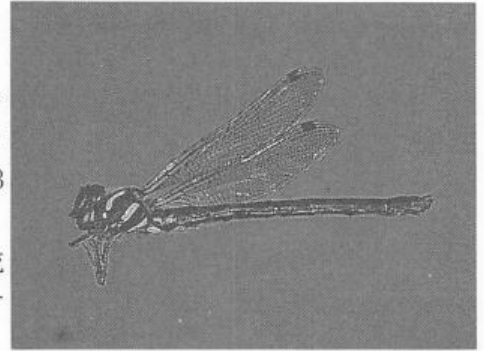


写真2 ムカシトンボ（♂）（大口市）

#### ムカシヤンマ科

ムカシヤンマームカシトンボ同様に原始的な特徴をもつ珍しいトンボ。北薩では霧島山（1960年）、栗野町（1965年）の記録がある。近年は大口市（未発表）でも見つかっている。幼虫は山地の川沿いにある湧水のしたたり落ちるようなコケの生えた斜面や崖に生息するため、道路開発などの影響を受けやすい。全国的にも産地は少ない。

#### サナエトンボ科

アオサナエー美しい緑色をした中位の大きさのサナエトンボ。栗野岳（1963年）に古い記録があり、近年大口市でも見つかっている。河川の中流付近の清流に見られる。

フタスジサナエー水生植物の多い池などに見られるやや小型のサナエトンボ。吉松町高島池（1958年）に古い記録があるのみであったが、近年大口市（1992年）、栗野町（1993年）でも産地が見つかっている。まだ山間部の池などを中心に調査すると産地が見つかるかも知れない。（口絵参照）

タベサナエー前種のフタスジサナエと同属でよく似ており、生息環境も似ている。成虫は春先の早い時期に出現する。北薩では大口市（1957年）、霧島（1957年）の古い記録がある。その後記録がなかったが、大口市で36年ぶりに発見された。本種も今後の分布調査が必要。

ヒメサナエー河川の上・中流にすむ小型のサナエトンボ。大口市、出水市、紫尾山の記録が多く、北薩では他地域より多く見られるようである。幼虫は上流から中流まで広範囲を生活圏としているためすべての環境条件が良くないとすみにくい。

#### ヤンマ科

オオルリボシヤンマー胸部、腹部がルリ色をした美しいヤンマ。北方系の山地性の種で、霧島山系の大浪池、白紫池などの大きな池に生息している（分布南限）。国立公園内であるため生息環境は保護されており、個体数も少なくない。（写真3参照）

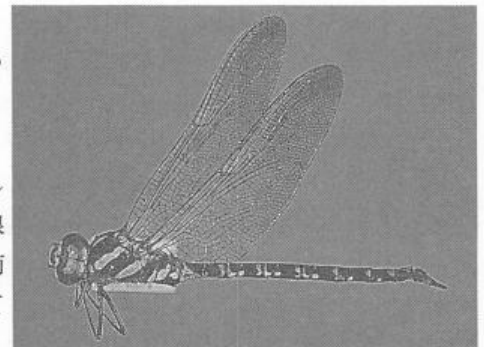


写真3 オオルリボシヤンマ（♂）（霧島）

#### エゾトンボ科

キイロヤマトンボー河川の中流付近に生息し、コヤマトンボに似るが生息域が限られ、産地は少ない。北薩では栗野町（1961年）の古い記録があるのみで、その後記録はない。本種も調査すべき種のひとつである。

ハネピロエゾトンボー全身が金属緑色をした美しいトンボで、タカネトンボに似るがタカネトン

ボより記録は少ない。北薩では川内市（1957年）、紫尾山頂（1981年）、宮之城町（1986年）に偶然飛来した成虫の記録があるのみ。幼虫は低山地の湿地やゆるやかな流れの清流にすむが、確実な産地は知られていない。

#### トンボ科

オオハラビロトンボー普通種のハラビロトンボに似るがやや大きく、オスは成熟すると腹部が赤くなる。九州及び沖縄県に生息するが、産地は限られ少ない。北薩では大口市（1986年）の1例の記録があるのみ。南薩には安定した生息地があるが、他地域の記録は追記録がなく偶産の可能性が高い。低山地の樹林に囲まれた古池に生息し、成虫は池のまわりのやや薄暗い茂みなどに見られる。

ハラボソトンボーシオカラトンボに似るが腹部がもっと細い。もともと南方系の種で南西諸島の各地に多産するが、九州北部ではまれ。県本土では霧島、指宿など温泉地帯に限って多く見られる。また温泉地帯の個体は他地域に比べ体色が黒化する傾向がある。

ヨツボシトンボー大口市、川内市、祁答院町、吉松町、栗野町に記録がある。植生の多い池に生息する北方系の種だが、近年分布を南に広げつつあり、競争関係にある同属の次種ベッコウトンボの生存を脅かすおそれがある。

ベッコウトンボーおもに平地の植生の多い池に生息するが、生息地の環境破壊などにより全国的に種の絶滅が心配されているトンボ。環境庁では絶滅危惧種に指定し、1994年から採集を禁止している。北薩では大口市（1957年）の古い記録の他、川内市、祁答院町に産地があるが、全国的にも貴重なこれらの生息地を維持し、全国各地の前例のごとく絶滅に追いついてやることのないよう見守っていく必要がある。（写真4参照）



写真4 ベッコウトンボ（♂）（祁答院町）

ハッチョウトンボー体長2cmたらずの小さなトンボ。北薩には記録が多く、これまでに大口市（田代、青木、尾ノ上、川岩瀬ほか）、出水市（下大川内平渡瀬）、川内市、宮之城町（北原、平川、川口、舟木、佐志ほか）、祁答院町（滝耳）、栗野町（二渡、恒次ほか）など各地に記録がある。低山地の湧水のあるような湿地や休耕田などに生息するが、生息地としては不安定で埋立てや耕作などにより消滅したところもあれば、新しく休耕田になり新産地として見つかるところも多い。

#### ② 半翅類

コオイムシ科ータガメは県内での産地は少なく、蘭牟田池、鶴田ダム、菱刈町下手（川内川）の産地は貴重。他の湖沼も探してみる価値がある。（口絵参照）

セミ科ーニイニイゼミ、クマゼミ、アブラゼミ、ハルゼミ（口絵参照）、エゾハルゼミ（口絵参照）、ヒメハルゼミ（口絵参照）、ヒグラシ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシの9種を産するが、エゾハルゼミは紫尾山・霧島山のブナ帯にのみ生息し（南限）、紫尾山頂では5月下旬から6月に出現。

#### ③ 甲虫類

クワガタムシ科ーオオクワガタ（1968年、林田温泉で1♂の記録がある）、ルリクワガタ（霧島山・南限）、オニクワガタ（大口市、紫尾山）、アカアシクワガタ（林田温泉付近、栗野岳、紫

尾山) など12種がいる。

カミキリムシ科—霧島山には多数の南限種を産するが、栗野のカシワ林にはツチイロフトヒゲカミキリ(羽が退化して飛べない種)が生息している。この他湿度の高い樹林に住むマルバネコブヒゲカミキリ(栗野岳、紫尾山)、紫尾山のアカガシ帯に際だって多いキュウシュウオオクボカミキリ、ブナ帯にいるクリサヒカミキリ(県内唯一)、霧島山と紫尾山で見られるシコクヒメハナカミキリ、クロソンホソハナカミキリ、セダカコブヤハズカミキリなど貴重種が多い。

ホタル科—いわゆる発光する種はヒメボタル、ゲンジボタル、ヘイケボタルの3種、後の2種は各地に産地が点在するが、陸生のヒメボタル(写真5参照)はやや局地的で、紫尾山(9合目付近)、大口市(針持、土瀬戸)、宮之城町、薩摩町(金山跡、境田、からめ)、祁答院町などの記録がある。

このほか、ヒゲコガネ(吉松町には多産する)(口絵参照)、ゲンゴロウ(吉松町)(写真6参照)、ヒメシジミガムシ(栗野町三日月池、樋脇町上之原)などが注目される。

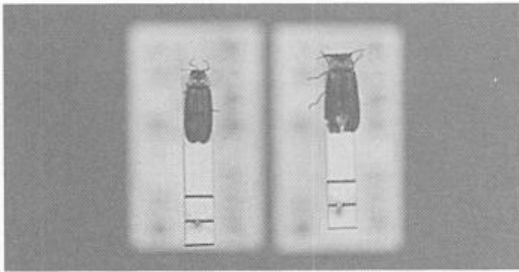


写真5 ヒメボタル(♂, ♀)(吉松町)

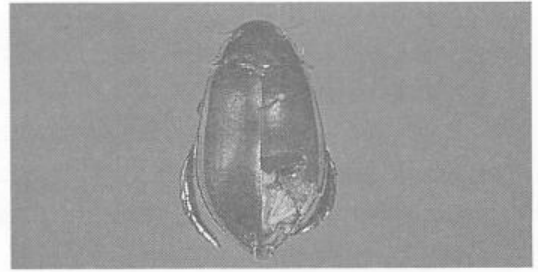


写真6 ゲンゴロウ(吉松町)

#### ④ チョウ類

##### セセリチョウ科

キバネセセリ—県内では霧島山のみ(南限)。

ギンイチモンジセセリ—吉松、大口、菱刈、宮之城町などの川内川堤防や各地のやや安定した草原に産地が点在する。

##### シジミチョウ科

ルーミスシジミ—この地域の絶滅種か絶滅危惧種。

これまでの記録は、大口市木之氏川上流・笹野の溪畔(1951年)、十曾ダムの路傍(1951年)、栗野岳温泉～カシワ林(1956、1961年)、紫尾山・登尾～紫尾峠(1957年)、栗野町国見岳(1966、1975年)、牧園町榮の尾温泉(1959年?)でいずれも1～2頭の記録。生息地はイチイガシ(食樹)のある照葉樹林で、各地ともほとんど伐採が進み、その後のたび重なる調査でもまったく発見されない。ちなみに、本種は奈良県春日山では国の天然記念物に指定されていたが、1962年頃絶滅している。(写真7参照)

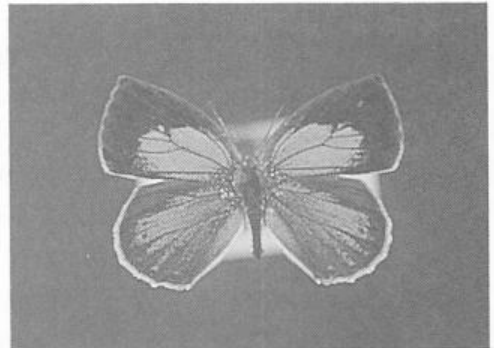


写真7 ルーミスシジミ(♀)(宮崎県)

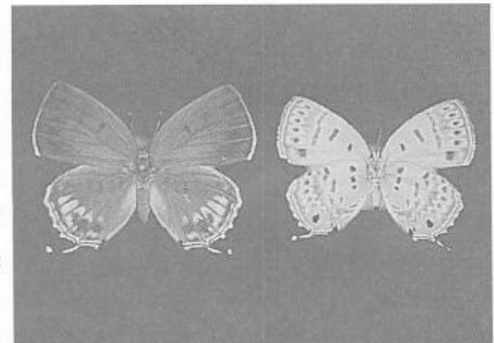


写真8 ウスイロオナガシジミ(表, 裏)(栗野町)

ミズイロオナガシジミー沢原高原のクヌギ林、栗野のカシワ・クヌギ林などの人工林によって残存している北方系の種。

ウスイロオナガシジミー四国・九州では栗野牧場のカシワ林が唯一の産地（南限）。1955年の発見当時は個体数が多かったが、その後カシワの減少（伐採）により漸減し、現在は絶滅危惧種といってよい。なお、カシワ林は近隣の山地や県外県内の各地にもあるが本種は全く発見できず、栗野牧場は多くの謎を秘めた貴重な産地である。（写真8参照）

メスアカミドリシジミー霧島山のみ（南限）。ヤマザクラが食樹。

アイノミドリシジミー霧島山（栗野～えびので1958年に1頭の記録がある。南限）

キリシマミドリシジミーアカガシ（主要な食樹）の多い照葉樹林に生息する。産地は出水市湯出・朝日岳、紫尾山、大口市奥十曾、川内市北部高地、入来町八重山、栗野岳温泉、霧島山一帯など。

フジミドリシジミー霧島山の高地には食樹のブナ帯にかなり広く生息しているが、県内では他に紫尾山山頂部に少数の記録があるのみ（南限）。ブナ帯の破壊・破損で絶滅危惧種になっている。

ハヤシミドリシジミー栗野牧場のカシワ林が県内唯一の産地（南限）であったが、1970年頃から姿を消して、代わりに次種エゾミドリシジミが少数見られるようになった。この交替劇は興味深い。謎解きの手がかりもないまま近年はカシワ林の衰退で絶滅危惧種か絶滅種になった。

エゾミドリシジミー霧島山の高地帯（ミズナラ林）のみに産する（南限）。

カラスシジミー大口市、菱刈町、吉松町、牧園町（石坂）、川内市（永利町）で、ハルニレを食樹として生き残っている北方系の種。出水平野では発見できない。（写真9、図1参照）

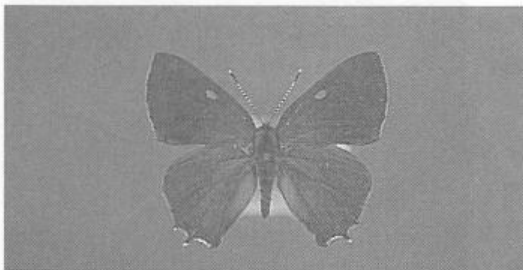
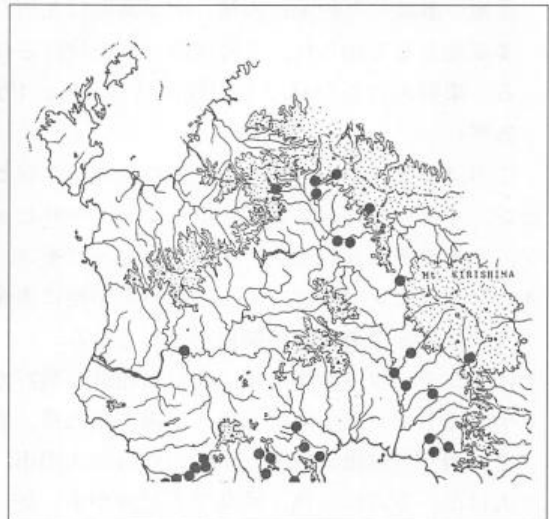


写真9 カラスシジミ（♂）（吉松町）

図1 カラスシジミの分布図

産地は食樹ハルニレの分布にほぼ一致する。北方系の種でありながら、出水平野や紫尾山一帯に欠落している。



クロシジミー幼虫がクロオオアリと共生する有名なチョウ。栗野岳温泉付近～カシワ林（1961～1962年には多発）、栗野町（二渡）、沢原高原、菱刈町（湯の尾）に記録がある。安定した生息地がなく絶滅危惧種。

スギタニルリシジミー渓谷沿いの古い照葉樹林に生息し、キハダ、ミズキが食樹。本種が生息するような照葉樹林は多様性が大きく自然度が高いといえる。大口市（奥十曾、布計）、紫尾山麓の出水市（定之段・絶滅？）、宮之城町（楠八重～堀切峠）、栗野岳温泉付近など。（写真10、図2参照）

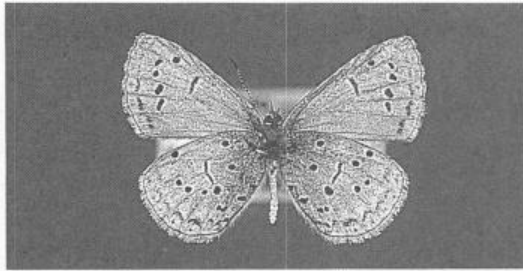
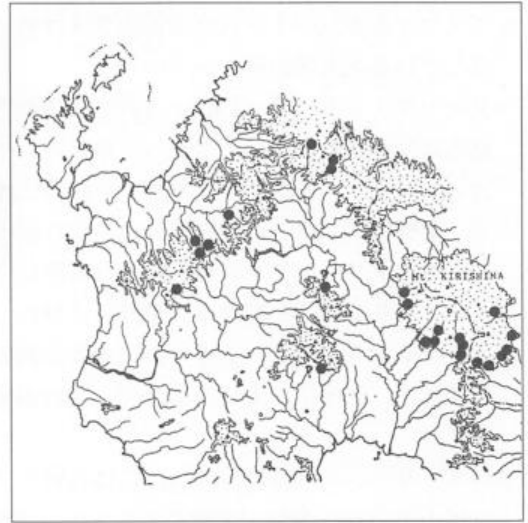


写真10 スギタニルリシジミ (裏) (大口市)

図2 スギタニルリシジミの分布図

産地は多様性の大きな古い照葉樹林に限られ、自然の豊かさの指標種ともいえる。等高線はalt.400m。?は絶滅した可能性の高い産地。



クロツバメシジミ—長島町獅子島，上甕島（長目の浜など），中甕島（南限）。ベンケイソウ科のツメレンゲなどの生育地のみに見られる。中甕島，下甕島の南限調査が期待される。（口絵参照）  
テングチョウ科

テングチョウ—北薩一帯では出水市，大口市，霧島山などに産する。甕島産は斑紋がやや大きく屋久島産に近いので詳しく調査する必要がある。エノキ・クワノハエノキが食樹。

タテハチョウ科

オオウラギンヒョウモン—1960～1970年代に全国的に産地が激減した絶滅危惧種。沢原高原は九州有数の多産地として知られ、その保護対策が検討されている。栗野のカシワ林でも少数が見られる。（写真11参照）

このほかヒョウモン類としてはウラギンスジヒョウモン，オオウラギンスジヒョウモン，ミドリヒョウモン，クモガタヒョウモン，メスグロヒョウモン，ウラギンヒョウモンが生息する。これらと平地に多産するツマグロヒョウモンとの関係が注目される。

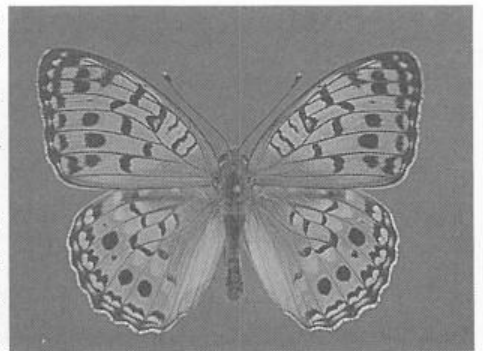


写真11 オオウラギンヒョウモン (♂) (吉松町)

ヒオドシチョウ—紫尾山頂，大口市布計，栗野カシワ林などに見られる。

タテハモドキ—近年北上してきた南方系の種。各地の湿地・休耕田の食草（オギノツメなど？）を利用し、成虫で越冬。川内市から阿久根市，出水市にかけての低地，薩摩郡各地，吉松町，大口市，さらに長島，甕島でも記録が多いが，確実な定着の北限地は明らかでない。

オオムラサキ—出水市（田之頭・1964年，芭蕉・1992年），大口市（布計，木地山，荒平，芳ヶ野上流）。以前は大口市の笹野，郡山，里でも見られたというが現在では発見できない。食樹エノキの生える古い照葉樹林が生息地で，霧島山一帯では発見されていない。（口絵参照）

ジャノメチョウ科

ジャノメチョウ—出水市上場高原，沢原高原，栗野カシワ林など安定したススキ原に残っている。紫尾山麓の平八重～平岩でも1965年の記録があるが，その後発見されない。

ヤマキマグラヒカゲ—紫尾山，栗野岳，霧島山の中腹から高地に生息する。

(ガ類)

コエビガラスズメ (吉松町, 1991年), ウスタビガ (大口市山の神, 1985年) (口絵参照), ヤマトハガタヨトウ (大口市), キュウシュウマエアカシロヨトウ (出水市定之段) はいずれも本県唯一の記録。このほかアミメリンガ (大口市布計) (写真12参照), エゾスズメ (大口市奥十曾) なども珍しい記録。カワゴケミズメイガ (写真13参照) は幼虫がカワゴケソウを食べる小型種で, 宮之城町おしどり橋付近には少ないので, 各地のカワゴケソウの産地でもみられるものであろう。

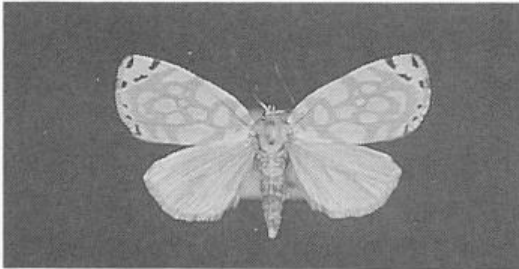


写真12 アミメリンガ (大口市)

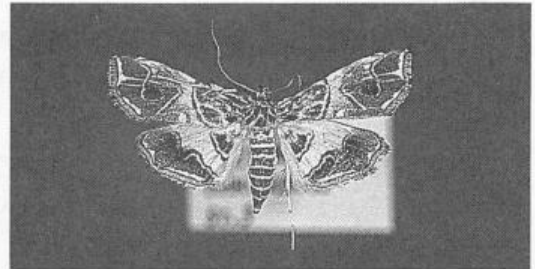


写真13 カワゴケミズメイガ (宮之城町)

ここで解説した昆虫は昆虫のごく一部であり, このほかに, バッタ・コオロギ類, カゲロウ・カワゲラ類, ハチ・アリ類, ハエ・アブ類など数多くの昆虫たちがおり, 貴重な種類も多いことを忘れてはならない。また研究不足ではっきりわからないものもかなりあるのでこれからの研究に期待するところが大きい。

### (3) 市町別にみた昆虫相とその課題

ここでは市町別に調査状況と注目すべき昆虫類をまとめてみたい。なお, この地方の調査はほとんどが県内の愛好者によってなされたもので, その結果大部分は鹿児島昆虫同好会誌「SATSUMA」に報告されている。

大口市—ほぼ全域にわたってチョウ・トンボ類を中心に調査されている。未発表記録もかなり多い。SATSUMA には1956年以来97編の報文のほか, 大坪による「虫っ子」(羽月北小学校自然観察クラブ発行) にも多くの記録がある。

県境の上場高原, 布計, 奥十曾, 久七峠, 間根ガ平にいたる山地帯地域, 西の出水市との境界一帯の小川内川, 井立田川, 平出水川流域, 朝日岳と山の神, さらに各地の河川の堤防, 散在する湖沼について調査がなされ, 多くの分布南限種を含む貴重種が発見されている。しかし, 近年のおもに伐採による環境変化はここも例外ではなく, 生存が憂慮される種が多い。とくに重要な産地としては, 木地山から布計を経て熊本県境にいたる山野川水系とその流域, 十曾池から奥十曾にかけての十曾溪谷, および井立田川の上流地帯は面白い。残存する照葉樹林がオオムラサキなどの蝶類, 甲虫類の生息地であり, ムカシトンボなど渓流性トンボ類の産地である。しかし, 比較的よい状態で残されている照葉樹林や溪流はごく限られ, とくに源流部はほとんど伐採され調査不十分のまま消失した。平地では井立田川の中流域(芳ヶ野)にある県内唯一のグンバイトンボの生息地が貴重である。ここは耕作地帯であるが河川の現状維持を図りながら保護したいところ。各地の大小の湖沼も古い状態を残しているものはいずれも貴重な水生昆虫の産地となっている。



菱刈町一川内川流域の調査が中心になっている。SATSUMA に発表された記録は16編と少ないが、耕作地や人里にみられる平地・低地性の種はほとんど発見されており、下手（川内川）ではタガメも確認された。

吉松町一樹林環境としては栗野岳山麓のタブの原生林が貴重種発見の期待がもてる。草原的環境として近年注目され始めた沢原高原は、蝶類以外の昆虫類の調査も重要である。また、点在する湖沼のトンボや水生昆虫も面白そうである。SATSUMA には19編の報文しかないが、「虫っ子」（吉松小学校自然観察クラブ）に貴重な記録が多数集積されつつある。

栗野町一栗野岳山麓（中腹部）の栗野牧場一帯のカシワ林はユニークな問題を抱える生息環境として注目される。隣接する栗野岳温泉周辺部の照葉樹林、低地の丸池なども調査記録の多い重要な生息地。SATSUMA にはチョウだけでも89編、トンボなどその他の昆虫で70編の記録がある。

牧場のカシワ林は九州唯一のウスイロオナガシジミの産地で、その由来は謎である。他の昆虫でも類似の希少種（ツチイロフトヒゲカミキリなど）が発見されていることから推察すれば、この地域は火山活動や気候変化にも影響されず、寒冷期時代の種を温存してきた可能性がある。さらに、ここにカシワやクヌギを植栽して林を維持してきた人の営みが、結果としてこれらの貴重種を保護してきたものであろう。このような夏緑樹林は照葉樹林にくらべて明るくて、眺望もよく、行楽地としても県内では珍しいところであるが、その整備に当たっては、早急にカシワの植栽を進め、牧場時代とはことなつた下刈り、野焼きなどの維持管理が必要である。栗野岳温泉付近の照葉樹林の保護・再生（周辺部の拡大）も切望される。

なお、低地の丸池はベニイトトンボなどの産地として得難いものであったが、近年人手を入れ過ぎて平凡な公園と化し貴重な自然が消滅した。かつて付近の小川にいたアオハダトンボも姿を消した。

牧園町一いわゆる霧島国立公園内は戦前・戦後に一通り調査されているはずであるが、発表された昆虫はチョウ、トンボなどごく一部に限られ、昆虫類の目録を含む資料はきわめて不十分である。とくに近年は大浪池など特別地域での昆虫採集が厳しく制限され、ほとんど調査されていない。山麓部の普通地域とともに現時点での、自然保護の視点をも加えた、専門家による本格的な調査が期待される。SATSUMA には牧園町を明記した報文は38編しかないが、単に大浪池、霧島山などとしたものはかなりの数に上る。これに引き換え、町の西南部の調査は遅れている。

出水市一北部の矢筈岳から東の上場、朝日岳の山地帯、南東部は白木川内川、高川、樋之谷川、定之段川、平良川沿いの山地、および出水平野一帯も調査記録があり、南部の紫尾山はかなりよく調査が進んでいる。しいていえば、南東部の黒田山、土取山、犬山岳の調査がまだ不十分である。出水市を明記した記録はSATSUMA に65編、「しびっちょ」（出水高校生物部誌）などがあり、このほか“紫尾山”（宮之城町との区別なし）の記録はSATSUMA にチョウ関係44編、その他の昆虫は39編にもものぼる。

草原性昆虫の生息地としての上場高原はジャノメチョウの産地、さらに詳細な調査と人手を加えた自然草原の維持が期待される。紫尾山山頂部のブナ帯は大半がすでに破壊されたが、エゾハルゼミなどがかろうじて残存している貴重な自然。現状以上に施設を造らず、車道の両側の草刈りなどは出来るだけ避けて欲しい。最も望ましいのは、駐車場を8合目付近に移し、関係者以外の方は徒歩で山頂まで行くようにすることであろう。上宮神社一帯の樹林はブナやアカガシのある照葉樹林の上部の古い姿をなんとかとどめ、フジミドリシジミ、キリシマミドリシジミ、アカ

アシクワガタ、オニクワガタなどの貴重な産地でもある。登山・参拝道以外は出来るだけ手を加えないで保護したいところ。北麓の流合～定之段は溪流沿いの樹林がスギタニルリシジミなどの多産地で魅力あるものだったが、車道の新設で消滅した。

今後の照葉樹林再生に工夫が望まれる。湯川内はムカシトンボの記録がある。平地から海岸部にかけては、田之頭と芭蕉のオオムラサキ（定着はやや疑問？）以外は特筆すべきものは知られていない。

**高尾野町**—高尾野川沿いに上流の紫尾山の堀切峠から高尾野ダムを経て、河口部の出水干拓まで、一通りの調査はなされているが、貴重種が得られていないこともあって発表された記録は少ない。SATSUMA に13編がある。ツルの渡来地である荒崎一帯についても同様である。

**野田町**—野田川の西部低地帯から南部山地の一帯は、橋元紘爾による1960年代の記録など、SATSUMA には22編の報文が出ている。注目された八幡神社の池のベニイトンボは池の改修で絶滅した。

**阿久根市**—北部の笠山から黒之瀬戸、脇本、佐潟、大川までの海岸沿いの低地帯、紫尾山から連なる山地帯など、一通りの調査はなされているが、注目すべき種は発見されておらず報告された記録は少ない。SATSUMA に13編があるのみ。

**鶴田町**—鶴田ダムではタガメなど断片的な調査例がある。北部の紫尾山からの山地帯、川内川流域も未調査ではないものの発表された記録は少ない。SATSUMA には13編の報文が出ている。鶴田ダムと周辺部の樹林（二次林）は、現在建設省の調査が始まっているのでその結果を注目したい。

**薩摩町**—報告された調査例はきわめて少ない。SATSUMA にはミヤマセセリ、タテハモドキなどチョウの記録が7編、ホタルやトンボの記録が2編ある。

**祁答院町**—蘭牟田池の調査がかなり進んで、貴重な水生昆虫やトンボ類が記録されている。SATSUMA にはチョウが14編、トンボなどその他の昆虫が15編ある。蘭牟田池はトンボ類の宝庫でベッコウトンボなどが多し、タガメも生息している。生息地の保存状態は良好であるが、周辺地域への植物群落（とくに樹木）の保護や再生への配慮が課題であろう。

**宮之城町**—紫尾山の記録は出水市と区別されずに発表されたものが多い（SATSUMA に83編）。町名を明記した地域の記録は SATSUMA に蝶で39編、その他の昆虫で35編ある。注目されるのはやはり紫尾山頂（出水市の項参照）と其中腹や山麓部で、楠八重一堀切峠（泊野川の流域の樹林）のスギタニルリシジミ、登尾から千尋滝までの照葉樹林（キシマミドリシジミなど）と溪流が重要である。川内川沿いの調査例も散見され、幼虫がカワゴケソウを食べるカワゴケミズメイガも少なくない。

**東郷町**—昆虫に関する調査記録は少なく、SATSUMA には7編しかない。北部の山地帯から川内川に合流する4つの河川流域などは古い照葉樹林が乏しく、希少種はあまり期待できないかも知れないが、種類数は決して少なくないと思われる。

**入来町**—南部の八重山、八重高原一帯についてはかなり調査されており、SATSUMA には40編の報文ある。八重山牧場は草原性昆虫（セアカオサムシなど）と糞虫類（ゴホンダイコクコガネなど）の産地、八重山の照葉樹林と溪流沿いの樹林は蝶類（キシマミドリシジミ、トラフシジミ、テングチョウなど）、甲虫（イシハラカンショコガネなど）、トンボ類の豊富などところである。

**樋脇町**—SATSUMA には5編の蝶についての報文があるに過ぎない。低地河川流域の古い湖沼

や湿地は調査すれば面白そうである。珍種はいなくても、昆虫の種類数は豊富と思われる。川内市一戦前から少数の調査例があり、SATSUMAには蝶類で47編、その他の昆虫で23編の報文がある。川内昆虫同好会が活動していた1957年から1959年にかけての記録も貴重である。昆虫の生息環境としては北端部の宇都川路上流域、南部の低山地、川内川流域と湖沼が目される。これらは1981年に川内市立図書館が発行した「川内の生物」の中で、「昆虫」(P.127-170)の章を設けて福田晴夫が詳しく紹介した。

チョウ類ではキリシマドリシジミ(北部高地のアカガシ)、カラスシジミ(永利町里のハルニレ)、オオウラギンスジヒョウモン(高城町)、クモガタヒョウモン(高城町)、オオウラギンヒョウモン(高城町、今村ヶ岳)は貴重な記録。ただし、近年の調査例は乏しく現状は不明。ヒョウモンチョウ類は草原の調査が期待される。

トンボ類はヨツボシトンボ(新田神社の池、中郷池、平佐町の池)、アオビタイトンボ(1991年、小比良池)などが注目される。

長島(東町・長島町)一長島、諸浦島、獅子島は一通り調査されている。海岸植生と結びつくクロツバメシジミ(獅子島)の記録が興味深い。

甑島(里村・上甑村・鹿島村・下甑村)一戦前からの調査記録もあるし、長崎県など県外の人たちによる調査も多い。上甑島の湖沼と海岸線、下甑島の照葉樹林と草地、湖沼はまだ貴重な種が発見される可能性が高い。普通種でも移動性の小さなものは、九州本島産とは形質の分化が認められる種も多い。(ナガチャコガネ、コシキトゲオトンボ)。分布北限かそれに近い種としてはアカガキメムシ、ムツボシシロカミキリ、オオフタホシテントウ、チャイロテントウなどがいる。種子島以南の南西諸島に生息しないハナカミキリ類が見られることは、九州本島との強い類似性を示している。

#### 参考文献

北薩の昆虫に関する文献は、戦前のものが霧島山や甑島について見られるが、大部分は戦後のもので、特にめざましいのは県内在住のアマチュアの愛好者・研究者によるものである。これらは種名の調べやすい昆虫群、チョウ、カミキリムシ、トンボ、セミなどに限られてはいるが、この地域の昆虫相の特色はかなり明瞭に知ることが出来る。関係文献はおそらく300編を越え、本稿ではそのすべてを収録できないので、主なものを紹介する。

・SATSUMA(鹿児島昆虫同好会誌):現在40巻105号まで発行されている。北薩の昆虫に関する文献の90%は本誌が占める。県立博物館と県立図書館に全巻所蔵。主な例をあげると次の通りである。著書、題、巻(号):頁、発表年代の順。

山元一裕・成見和総:鹿児島県のトンボ(II) 27(78):219-248, 1978.

福田晴夫:鹿児島県のセミ 17(50):1-12, 1968.

中尾健一郎:鹿児島県のハンミョウ 17(50):13-20, 1968.

松井英司・高井泰・田辺力:鹿児島県の水生昆虫 37(100):61-115, 1988.

森一規:鹿児島県産カミキリムシ分布表 37(100):119-148, 1988.

大坪修一・田中洋:鹿児島県産蝶類・市町村別分布表 37(100):223-238, 1988.

町田明哲:大口市を中心とした伊佐郡の蝶相 5(12):1-4, 1956.

大坪修一:鹿児島県大口市周辺の昆虫(1) 37(100):239-286, 1988.

大坪修一:鹿児島県出水地方で採集した昆虫類 34(94):64-101, 1985.

このほか、チョウに関するこの会の特別出版物として、

「鹿児島県産蝶類文献目録」(1961年：福田晴夫) 306頁

「鹿児島県の蝶類」(1962年：福田晴夫・田中洋) 354頁

「鹿児島県のチョウの生活」(1967年：福田晴夫・田中洋) 374頁がある。

・虫っ子(羽月北小学校自然観察クラブ)：1986～1990年に52号まで発刊。その後、吉松小学校自然観察クラブから1990～1994年に99号まで発刊継続中。大坪修一編著で、毎号4頁ながら多くの記録が集積されている。

・すみながし(川内昆虫同好会誌)：1957～1959年に3号まで刊行した。川内市内と紫尾山の記録がある。

・高校の生物部誌：「しびっちょ」(出水高校)－1968～1978年に第9号まで発行。出水市各地、紫尾山、大口市、甌島などの調査報告がある。その他「牛屎院」(大口高校)、「甲南生物」(甲南高校)、「BIOLOGY DATA」(鹿児島高校)、「生物部誌」(ラ・サール学園)などに大口市、紫尾山、冠岳などの記録が散見される。

・大学のサークル誌：「LEBEN」(鹿児島大学生物研究会誌)、「生物研究会誌」(福岡大学)

・鹿児島のホテル(鹿児島県ホテルを育てる会)(1991年)1号：25頁。他に「ホテル便り」(各号1頁)が1989～1994年に61号まで出ている。

・県外の昆虫同好会誌：「くろせせり」(九州蝶類同好会)、「KORASANA」(久留米昆虫同好会)、「北九州の昆虫」(北九州昆虫趣味の会)

以上の他、鹿児島県その他の団体が出した総合的な報告書としては次のようなものが参考になる。

・鹿児島の自然(1964年)371頁 鹿児島県理科教育協会：昆虫は竹村芳夫・福田晴夫・田中洋が担当。

・紫尾の山河(1966年)163頁 鹿児島県高校教育連合会理科部会：昆虫は肥後昌幸・田中洋・橋本紘爾が担当。

・甌島自然公園候補地学術調査報告書(1974年)168頁 国立公園協会：昆虫は田中洋が担当。

・鹿児島県西部及び北部地域自然環境保全基本調査(1974年)216頁 鹿児島県自然愛護協会報告 鹿児島県：昆虫は竹村芳夫・福田晴夫が担当。

・日本の重要な昆虫類 南九州・沖縄版(1980年)(鹿児島県分は76頁)

・第2回自然環境保全基礎調査(緑の国勢調査)動物分布調査(昆虫類)報告書 環境庁編・大蔵省印刷局：担当は福田晴夫・山元一裕・竹村芳夫・大原賢二・中川耕人

・鹿児島の自然環境に関する文献目録(1984年)148頁 鹿児島県(環境管理課)：昆虫は福田の資料により、北薩地区はチョウ(約200編)とセミ(約20編)の文献がリストアップされている。

・鹿児島のすぐれた自然(1989年)314頁 鹿児島県環境管理課編 鹿児島県公害防止協会：昆虫は福田晴夫が担当。

・鹿児島と世界の大昆虫展図録(1994年)91頁 鹿児島県立博物館

(執筆者 福田晴夫, 大坪修一, 江平憲治)

## 7 北薩の哺乳類相

屋久島、種子島と奄美大島間の七島灘に引かれた、動物地理上の旧北区と東洋区の境界線である渡瀬線以南の奄美諸島と沖縄県を除く日本の哺乳動物相は動物地理上旧北区に属し、ほぼ同一の動物種が分布生息している。北海道、本州、四国、九州あるいは佐渡、隠岐、対馬、壱岐など海によって隔てられている島々で同一種が多少その大きさや体色などを異にして亜種として扱われているものもあるが、その差異は小さい。したがって鹿児島県本土の哺乳動物相は九州という大きな島のそれと異ならない。ましてや、北薩として特異的な動物種はいない。また、両生・爬虫類や昆虫類にみられるような北薩を南限地あるいは北限地とする哺乳動物種もない。つぎに、自然破壊の進んだ市街化地域と幾分か自然が残存する山岳森林地域では生息分布する動物種は異なるが、北薩の都市である川内市、出水市、大口市、阿久根市は他の町と変わらない山岳森林地域を郊外に有している。要するに、離島を除く北薩17市町(村)は、北は国見山系、西は紫尾山系、南は冠岳・烏帽子岳、そして東に霧島山系と連なる地域で哺乳動物にとっては同質の生息地とみて差し支えないだろう。また、大型や中型の哺乳動物は移動範囲も広いので、北薩17市町の間に哺乳動物の分布の差異は見いだしにくいとおもわれる。

しかしながら、里村、上甌村、鹿島村、下甌村の甌島列島や長島町、東町の長島、伊唐島、獅子島は海によって隔てられているため、また小さい島であるため、絶滅した動物種もあるようで生息・分布する種数は少ない。たとえば、上甌島と下甌島には縄文・弥生時代にはシカもイノシシも生息していたが(遺跡より出土する)、現在は生息していない。なお、甌島列島は8,000年~10,000年前に九州本土と分離したといわれるので種が変化するほどの年代がかかっていなく、亜種化の問題は考えなくてよいと思われる。一方、長島は黒ノ瀬戸大橋の建設によって九州本土と連絡したため、九州本土の哺乳類の流入がみられるといわれる。

従来の北薩の哺乳動物の調査研究は哺乳類全般についてのものや狩猟鳥獣に関するものは、若干みられるが、専門的に種別に調査したもの、すなわち、ネズミ類のトラップによる調査とか、コウモリ類の捕獲調査、シカの生息数調査などのような本格的な報告は見当たらない。

1945年以降、すなわち、戦後の北薩地域の哺乳動物に関する主な報告をあげると次のようなものがある。

日野光次・森田忠義(1964)による「鹿児島島の動物」、森田忠義(1974)の「薩摩半島西側及び北薩地方の哺乳動物」、迫静男(1974)の甌島自然公園候補地学術調査報告書の「獣類」、鹿児島県発行(1978)の環境庁委託「第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書」、鹿児島県育英財団(1979)の「鹿児島島の自然」、鹿児島県発行(1989)の「鹿児島島のすぐれた自然」、そのほかに未公開であるが鹿児島県の「狩猟鳥獣生息分布調査報告書」等がみられる。

上記の文献や資料と今回の下甌村の調査などを加味して、北薩に生息分布する哺乳動物を、北薩17市町(村)と長島町・東町、そして里村・上甌島・鹿島村・下甌島の3地域にわけて記録すると次のようになる。

### (1) 食虫目

北薩17市町：サイゴクジネズミ、アズマモグラとキュウシュウヒミズが生息している。モグラについては、ヤクシマモグラあるいはコウベモグラと記述している文献もあるが、最近では南九州

のモグラはアズマモグラとして扱っているようである。分類そのものに問題点があるようだが、捕獲して精細な形態学的・遺伝学的検討が必要と思われる。他に、ニホンカワネズミの生息の可能性もある。

長島町・東町：九州本土とおなじモグラが生息している。

里村・上甌村・鹿島村・下甌村：学術的報告はみられないが、今回の調査でモグラ類の生息は明らかである。しかし、種の同定はできていない。

## (2) 翼手目

北薩17市町：ニホンキクガシラコウモリ，ニホンコキクガシラコウモリ，アブラコウモリ，ヤマコウモリ，ホンドノレンコウモリおよびナミエヒナコウモリの生息が記載されている。また、モモジロコウモリおよびユビナガコウモリの生息も予想される。

長島町・東町：ナミエヒナコウモリのみが報告されているが、ほかのコウモリの生息も予想される。

里村・上甌村・鹿島村・下甌村：今までに学術的報告はみられないが、コウモリ類の生息は明らかであるが、まだ、種名は分かっていない。甌島には洞窟もあるので翼手類の専門家の調査を期待したい。

## (3) 霊長目

北薩17市町：ホンドサルがほぼ全市町に生息する。

長島町・東町および里村・上甌村・鹿島村・下甌村にはサルは生息しない。

## (4) 兎目

北薩17市町：キュウシュウノウサギが全市町に生息する。

長島町・東町：キュウシュウノウサギが生息する。

里村・上甌村・鹿島村・下甌村：正式な記載はみられないが、かつて、筆者は下甌村で得られたノウサギの死体を検索した。キュウシュウノウサギであった。今回の調査でもノウサギの糞を見いだしている。

## (5) げっし目

北薩17市町：ニホンリス，キュウシュウムササビ，ヤマネ，ホンドアカネズミ，ホンドヒメネズミ，シコクカヤネズミ，ホンドハツカネズミ，ニホンクマネズミ，ニホンドブネズミの生息が報告されている。ほかに，ヨウシュクマネズミとヨウシュドブネズミの生息も記載されている。天然記念物に指定されているヤマネは正式には大口市のみで報告されているが，大隅半島にも分布するので北薩のほかの市町にも生息する可能性は高いと考えられる。ニホンリスの生息分布ははっきりせず，生息してもその数はきわめて少ないものと思われる。このほか，キュウシュウモモンガの生息も予測されている。

長島町・東町：ニホンクマネズミとニホンドブネズミの生息が報告されている。その他，ホンドアカネズミやホンドヒメネズミの生息の可能性もある。

里村・上甌村・鹿島村・下甌村：ホンドアカネズミとホンドヒメネズミの生息が記載されている。今回の調査では下甌村の人々から小型のネズミ類の生息情報を得ているが，種の同定はでき

ていない。

## (6) 食肉目

北薩17市町：ホンドタヌキ、ホンドキツネ、ホンドテン、ホンドイタチ、ニホンアナグマの生息が報告されている。これらは17市町すべてに生息していると思われる。この他、チョウセンイタチが生息することは確かなことといわれている。また、1963年には川内川河口でニホンカワウソが捕獲されているが、その後はニホンカワウソの生息の情報はない。

長島町・東町：ホンドタヌキの生息は記載されている。多分、ホンドイタチも生息すると予想される。

里村・上甑村・鹿島村・下甑村：ホンドタヌキのみが生息することになっているが、ホンドイタチも多数生息している。また、迫の報告をみるとニホンアナグマの捕獲標本があるとのことである。

## (7) 偶蹄目

北薩17市町：17市町全体にニホンイノシシとキュウシュウジカが生息している。阿久根大島には他の亜種のニホンジカも移入されたようである。

長島町・東町：黒ノ瀬戸大橋完成後、長島にニホンイノシシがみられるようになったといわれる。

里村・上甑島・鹿島村・下甑村：上甑島と下甑島の古代遺跡からはニホンイノシシおよびキュウシュウジカの骨が出土するが、現在は両種とも生息しない。イノシシは大正時代迄は生息していたといわれる。

これらの動物種のほかに、1963年に川内川で鱧脚目のファイリアザラシが迷獣として捕獲された記録が残っている。

以上が、現時点での北薩地域における哺乳動物の生息分布状況を文献をまとめることによって略述したが、現在の学術的知識からみると内容が極めて不十分であると認めざるをえない。今後、北薩17市町村地域では、小型哺乳動物についてはモグラ類（食虫目）、ネズミ類（げっし目）、コウモリ類（翼手目）などに細かく分けて、専門的に捕獲調査をする必要があると考えられる。また、離島においては、九州本土との距離による変化も考えられ、学術上興味深い点もあるで詳細な調査の実施が期待される。甑島列島についてみても今回の調査では上甑島と中甑島は全く調査できなかった。甑島列島には獣（哺乳類）を対象とされるハンターがいないため、情報も多くなり徹底した詳細な調査が必要と思われる。さらに、東町の獅子島についても哺乳動物の学術報告はみられないので今後の詳細な検討を必要としている

開発行為が都市周辺へ進行していき、山林地域からも緑がじょじょに減少し、コンクリートの構造物が増えて、哺乳動物にとってその生息環境はますます悪化している現在、動物種保全、環境保全のうえからも鹿児島県内の大規模で詳細な動物分布調査が実施されることを期待したい。

## 文献資料

- 1) 日野光次・森田忠義 1964：鹿児島島の動物，鹿児島島の自然，173～191 鹿児島県理科教育協会
- 2) 森田忠義 1974：VII 獣類調査，薩摩半島西側及び北薩地方の哺乳動物，薩摩半島西側及び

県北部の地域自然保護基本調査, 179~194, 鹿児島県

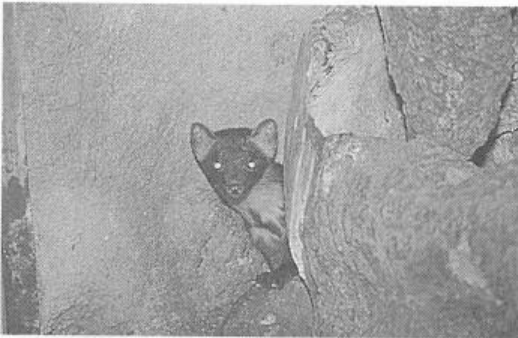
- 3) 迫静男 1974: 動物, 獣類 甌島自然公園候補地学術調査報告書, 16~17, 国立公園協会
- 4) 鹿児島県 1978: 環境庁委託 第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書 (哺乳類), 鹿児島県
- 5) 鹿児島県育英財団 1979: 鹿児島島の自然——本でみる博物館, 110~122, 鹿児島県育英財団
- 6) 鹿児島県森林保全課 1987: 狩猟鳥獣生息分布調査報告書
- 7) 大塚閏一・森田忠義 1989: 3. 動物, (1)哺乳類, 鹿児島島のすぐれた自然, 133, 145~153, 鹿児島県保健環境部環境管理課編



タヌキ



ニホンアナグマ



テン

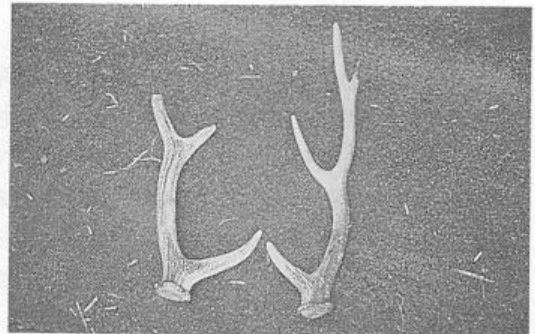


ムササビ



薩摩町で捕獲されたホンダギツネ

(酒匂 猛 撮影)



春先のシカの落角

(執筆者 大塚閏一)



## 8 北薩の鳥類相

北薩地区は鹿児島県の西北に位置している。門田（1964）の鹿児島県の地形区分によれば薩摩地塁の中の肥薩山塊、出水盆地、紫尾山塊、川内盆地、薩隅地塊そして八重山山塊の北一部が含まれる。肥薩山塊は鹿児島県と熊本県との県境をなす山地で、東から宮之尾岳（877m）国見岳（969m）、矢筈岳（887m）がならんでいる。出水盆地は肥薩山塊と紫尾山塊の間にはさまれた盆地で山麓にはみごとな扇状地が発達し、米ノ津川や野田川の下流には三角州からなる出水平野が広がっている。紫尾山塊の中心部に紫尾山が位置する。川内盆地は川内川に沿う盆地で河水の侵蝕作用によってできた低地である。川内川は本県最大の河川であり、延長126km、流域面積1570km<sup>2</sup>の中、山地部は80%、平地部20%を占めている。薩隅地塊は北から安良岳（604m）、国見岳（649m）、中の岳（654m）、烏帽子岳（703m）、真黒岳（407m）がならび、その中には外輪山に囲まれた一種のカルデラ型の湖沼・藪牟田池（海拔295m、水深3m）がある。八重山山塊は花尾山（540m）、雄岳（436m）、八重山（677m）、重平山（523m）、冠岳（516m）笠山（342m）などからなり、この山塊の北側に川内盆地が広がる。

鳥類はそれぞれの習性から森林、平野部や耕作地、湖沼、河川などの環境を選び、それに適応しながら生きている。

今回の調査対象市町村は、北薩地区の出水市、高尾野町、野田町、<sup>\*</sup>阿久根市、大口市、菱刈町、吉松町、栗野町、牧園町、薩摩町、鶴田町、宮之城町、祁答院町、入来町、樋脇町、東郷町、川内市、東町、長島町、里村、上甑村、鹿島村、下甑村の4市15町4村である。

鳥類で北薩地区だけに生息するというような固有の鳥類はいない。北薩地区でみられる鳥類のなかでは、甑島に生息するカラスバトが天然記念物であり、環境庁編（日本の絶滅のおそれのある野生生物）「レッドデータブック」における鳥類について、既存の関係資料と文献を参考にし、一部に著者の知見を加え、各グループごとに概説する。

### (1) 鳥類相の概説

北薩地区でみられる鳥類は、一年を通して生息する留鳥と、春になれば繁殖のために北に渡っていく冬鳥や南から渡ってくる夏鳥、そして、秋になると越冬のために北から渡ってくる冬鳥や南へ渡っていく夏鳥がある。

日本の鳥類の生活は年を通じてみると、繁殖期と非繁殖期からなり、その間に渡りを行う移動性のものと、周年定着性のものとある。移動性のものには短距離の地域移動から長距離の渡りまであり、何れも繁殖地と越冬地の年周期移動である。鳥を移動の観点からみると、渡り鳥（冬鳥・夏鳥・旅鳥）と留鳥（漂鳥・真留鳥・半留鳥）に区分される。

北薩地区には世界最大のツルの越冬地である出水干拓がある。また、サシバやアカハラダカ等の渡り鳥の重要な通過地点であり、甑島には島嶼としての鳥相が観察され、鳥の話題にことかない地域である。

北薩地区の純粋な鳥類となると、周年を通して当地に生息する鳥の留鳥であろう。ここでは留鳥を中心に記載するが、簡単に渡り鳥について、また、天然記念物の鳥や環境庁編「レッドデータブック」（日本の絶滅のおそれのある野生生物）に掲載されている特殊鳥類については略記する。

① アビ目

アビ類は冬鳥として飛来する。北薩地区では、アビが阿久根市牛之浜や出水市野田川での記録がある。シロエリオオハムが出水市荒崎周辺、下甌島手打で記録がある。

② カイツブリ目

カイツブリは北薩地区の河川や湖沼に一般的で、一年を通して生息する留鳥である。北薩地区ではこのほかに冬鳥としてカンムリカイツブリ、アカエリカイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリが飛来する。

「レッドデータブック」危急種としてカンムリカイツブリがあるが、この種は出水市荒崎周辺川内川河口で冬鳥としてみられる。

③ ミズナギドリ目

オオミズナギドリは甌列島双子島、野島などで繁殖しており、出水、串木野の沿岸にも飛来することがある。

④ ペリカン目

カツオドリ科カツオドリが甌列島、出水干拓、串木野などの沿岸に飛来する。ウ科のカワウ、ウミウ、ヒメウは冬鳥として北薩地区にも飛来する。

⑤ コウノトリ目

北薩地区の河川や湖沼にみられるサギ科の鳥は、サンカノゴイ、ヨシゴイ、ミゾゴイ、ゴイサギ、ササゴイ、アカガシラサギ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、カラシラサギ、アオサギ、ムラサキサギなどである。クロサギは海岸線に一年を通して生息する鳥である。

上記のサギ科の鳥のなかで「レッドデータブック」の希少種としてサンカノゴイが出水市干拓、高尾野町東干拓、川内川河口で、ミゾゴイが出水市干拓、高尾野町東干拓で、チュウサギ、カラシラサギが出水市干拓で記録がある。

コウノトリ科の鳥は、コウノトリが出水干拓、出水荒崎、阿久根市鶴川内楡水田で、ナベコウが出水荒崎、阿久根で記録がある。「レッドデータブック」ではコウノトリは絶滅危惧種、ナベコウは希少種として区分している。

トキ科の鳥は、ヘラサギ、クロツラヘラサギ、クロトキが出水干拓、出水荒崎で記録がある。「レッドデータブック」ではヘラサギ、クロツラヘラサギ、クロトキのいずれも希少種として区分している。

⑥ ガンカモ目

ガンやカモの仲間はほとんどが冬鳥であるがカルガモは留鳥とされている。しかし、夏も居残るカルガモはごく一部であり、ほとんどは他のカモ類と同じで渡り鳥である。北薩地区ではハイイロガン、マガン、ヒシクイ、サカツラガン、オオハクチョウ、コハクチョウ、アカツクシガモ、ツクシガモ、オシドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、トモエガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、オナガガモ、シマアジ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ミコアイサそしてカワアイサの記録があり、その殆どが出

水干拓，出水荒崎での記録である。上記のガンカモ類の中で「レッドデータブック」ではサカツラガン，ツクシガモは危急種，コクガン，マガン，ヒシクイ，コハクチョウ，アカツクシガモ，オシドリ，トモエガモが希少種として区分されている。

#### ⑦ ワシタカ目

ワシタカ類ではミサゴ・トビが留鳥である。トビは海岸や湖沼そして市街地に多くごく一般的な鳥である。ミサゴは大きな河川や岩礁地区にみられる。北薩地区ではこのほかにワシタカ科のオジロワシ，ツミ，ハイタカ，オオノスリ，ノスリ，サシバ，カタジロワシ，クロハゲワシ，ハイイロチュウヒ，マグラチュウヒ，チュウヒ，ハヤブサ科のハヤブサ，チゴハヤブサ，コチョウゲンボウ，チョウゲンボウの記録があり，その殆どが出水干拓，出水荒崎での記録が多い。上記のワシタカ類の中で「レッドデータブック」では，オジロワシは絶滅危惧種，ミサゴ，チュウヒ，ハヤブサは危急種，ハイタカは希少種として区分されている。

#### ⑧ キジ目

キジ類ではコジュケイ・キジ・コシジロヤマドリが留鳥であり，コジュケイは北薩地区のいたるところでみられ，キジは平地部，コシジロヤマドリは山地部で一般的である。

「レッドデータブック」の希少種としてコシジロヤマドリがある。

#### ⑨ ツル目

クイナ科のバンは留鳥である。北薩地区には出水平野という世界最大のツルの越冬地があり1994年の現時点でその数が一万羽を越えようとしている。出水平野に飛来するツルの仲間はナベヅルとマナヅルが主であるが，その他にクロヅル，タンチョウ，カナダヅル，ソデグロヅル，アネハヅルの記録がある。クイナの仲間ではクイナ，ヒメクイナ，ヒクイナ，バン，ツルクイナ，オオバンが出水干拓，出水荒崎で，シロハラクイナが串木野市で記録がある。

上記のツル類の中で「レッドデータブック」では，タンチョウは絶滅危惧種，ナベヅル，マナヅルは危急種，クロヅル，カナダヅル，ソデグロヅル，アネハヅルは希少種として区分されている。

#### ⑩ チドリ目

チドリ類のコチドリ・イカルチドリ・シロチドリ，シギ類のイソシギ，タマシギ類のタマシギが留鳥とされている。

北薩地区では出水平野や周辺地域に沢山の種類のシギ・チドリ類が飛来する。これまでにタマシギ科のタマシギ，チドリ科のコチドリ，イカルチドリ，シロチドリ，メグイチドリ，オオメグイチドリ，オオチドリ，ムナグロ，ダイゼン，ケリ，タゲリ，シギ科のキョウジョシギ，ヨーロッパトウネン，トウネン，ヒバリシギ，オジロトウネン，アメリカウズラシギ，ウズラシギ，ハマシギ，サルハマシギ，コオバシギ，オバシギ，ミュビシギ，ヘラシギ，エリマキシギ，キリアイ，オオハシシギ，シベリアオオハシシギ，ツルシギ，アカアシシギ，コアアシシギ，アオアシシギ，クサシギ，タカバシギ，キアシシギ，イソシギ，ソリハシシギ，オグロシギ，オオソリハシシギ，ダイシャクシギ，ホウロクシギ，チュウシャクシギ，コシャクシギ，ヤマシギ，タシギ，ハリオシギ，チュウジシギ，オオジシギの記録がある。アオシギは下甕島青瀬川での記録

がある。セイタカシギ科のセイタカシギ、ヒレアシシギ科のアカエリヒレアシシギ、ツバメチドリ科のツバメチドリ、カモメ科のユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、カモメ、ウミネコ、ハジロクロハラアジサシ、クロハラアジサシ、ハシブトアジサシ、アジサシ、セグロアジサシ、コアジサシの記録がある。ウミスズメ科のウミスズメやカンムリウミスズメは串木野沿岸の記録である。

上記のチドリ目の中で「レッドデータブック」では、ヘラシギ、シベリアオオハシシギ、カラフトアオアシシギ、コシヤクシギ、カンムリウミスズメが危急種で、アカアシシギ、ホウロクシギ、オオジシギ、セイタカシギ、ツバメチドリ、コアジサシ、ウミスズメが希少種に区分される。

#### ⑪ ハト目

ハト類ではカラスバト、キジバト、アオバトが留鳥である。「レッドデータブック」の危急種そして国指定の天然記念物のカラスバトがあり、著者は1994年10月29, 30日下甌島手打で観察した。

#### ⑫ ホトトギス目

ホトトギス類には留鳥はない。北薩地区ではツツドリが紫尾山頂、大口奥十曾、下甌島で、ホトトギスは旅鳥として一般的である。

#### ⑬ フクロウ目

フクロウ類ではフクロウ、オオコノハズクが留鳥である。これらの他にトラフズク、コミミズク、コノハズク、アオバズクの記録がある。

#### ⑭ ヨタカ目

ヨタカ類には留鳥はない。夏鳥として渡って来るが、今までに北薩地区では記録はない。

#### ⑮ アマツバメ目

アマツバメ類ではヒメアマツバメが留鳥である。ヒメアマツバメは串木野市、大口曾木ノ滝、栗野で、アマツバメは出水荒崎周辺、紫尾山頂で観察される。

#### ⑯ ブッポウソウ目

ブッポウソウ目カワセミ科でヤマセミ、カワセミが留鳥である。夏鳥としてアカショウビンが渡来する。重要種ではないが、旅鳥のヤツガシラ科ヤツガシラが出水干拓で記録がある。

#### ⑰ キツツキ目

キツツキ類ではアオゲラ、オオアカゲラ、コゲラが留鳥である。コゲラは一般的であるが、他のキツツキは少なく、アオゲラは出水樋之谷・定之段、高尾野江内、紫尾山頂、入来浦之名、串木野西岳、大口奥十曾、栗野牧場で記録がある。オオアカゲラは出水樋之谷、大口大住池、布計天狗岩の記録がある。筆者は大口市布計泉水平で1990年から1994年のあいだ毎年確認している。アリスイは出水干拓、出水荒崎周辺での記録がある。

## ⑮ スズメ目

スズメ目のなかの留鳥は、ヒバリ科のヒバリ、セキレイ科のキセキレイとセグロセキレイ、ヒヨドリ科のヒヨドリ、モズ科のモズ、カワガラス科のカワガラス、ミソサザイ科のミソサザイ、ヒタキ科ツグミ亜科のイソヒヨドリとトラツグミ、ヒタキ科ウグイス亜科のウグイスとセッカ、シジュウカラ科のコガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ科のゴジュウカラ、エナガ科のエナガ、メジロ科のメジロ、ホオジロ科のホオジロ、ホオアカ、アトリ科のカワラヒワ、ハタオリドリ科のスズメ、ムクドリ科のムクドリ、カラス科のカケス、ハシボソガラスそしてハシブトガラスがある。

留鳥のほかで、北薩地区に渡り鳥として渡来、または立ち寄るスズメ目の鳥を列記すると、ツバメ科のジョウドウツバメ、ツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ。セキレイ科のツメナガセキレイ、キガシラセキレイ、ハクセキレイ、ビンズイ、セジロタヒバリ、ムネアカタヒバリ、タヒバリ。サンショウクイ科のサンショウクイ。レンジャク科のキレンジャク、ヒレンジャク。ミソサザイ科のミソサザイ。ヒタキ科のオガワコマドリ、ルリビタキ、ジョウビタキ、ノビタキ、トラツグミ、アカハラ、シロハラ、ツグミ、ハチジョウツグミ、ヤブサメ、シマセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、センダイムシクイ、ククイタダキ、キビタキ、オオルリ、エゾビタキ、コサメビタキ、サンコウチョウ。ツリスガラ科のツリスガラ。ホオジロ科のコジュリン、カシラダカ、ミヤマホオジロ、シマアオジ、ズグロチャキンチョウ、ノジコ、アオジ、クロジ、シベリアジュリン、オオジュリン、サバンナシトド。アトリ科のアトリ、ベニヒワ、ベニマシコ、ウソ、コイカル、イカル、シメ。ハタオリドリ科のニュウナイスズメ。ムクドリ科のコムクドリ、カラムクドリ、ホシムクドリ、ハッカチョウ。オウチュウ科のオウチュウ。カラス科のコクマルガラス、ミヤマガラスである。

## (2) 北薩地区における鳥類の生息状況の特徴

世界的に有名なのがツル類の渡来地、出水平野であろう。この地にはナベヅルとマナヅルの群れが主である。数は少ないがクロヅル、タンチョウ、カナダヅル、ソデグロヅル、アネハヅルが年によって違いがあるがナベヅルやマナヅルの大群に混じり飛来してくる。ツル目の鳥類だけでなくコウノトリ目、ガンカモ目、ワシタカ目、チドリ目、スズメ目等の珍種や特殊鳥類が時折飛来し話題をよんでいる。

鹿児島県最大の川内川も鳥類にとっては重要な生活環境であり、いくつかの特徴が見られる。下流域には冬季には出水に飛来した特殊鳥類が姿を現すこともある。中流域にはサギ類の大規模な集団営巣地がある。鶴田ダム湖は両岸に山が迫り、特殊な環境をつくっている。栗野地区には冬季になれば渡りをするカラスのミヤマガラスやコクマルガラスの大群も見られる。上流域のなかでも熊本県との県境は奥深い山岳地であり特徴的な森林性鳥類相が観察される。

(執筆者 鮫島正道)

## 9 北薩の両生類・爬虫類相

北薩地区は鹿児島県の西北に位置している。門田（1964）の鹿児島県の地形区分によれば薩摩地塁の中の肥薩山塊、出水盆地、紫尾山塊、川内盆地、薩隅地塊そして八重山山塊の北一部が含まれる。肥薩山塊は鹿児島県と熊本県との県境をなす山地で、東から宮之尾岳（877m）国見岳（969m）、矢筈岳（887m）がならんでいる。出水盆地は肥薩山塊と紫尾山塊の間にはさまれた盆地で山麓にはみごとに扇状地が発達し、米ノ津川や野田川の下流には三角州からなる出水平野が広がっている。紫尾山塊の中心部に紫尾山が位置する。川内盆地は川内川に沿う盆地で河水の侵蝕作用によってできた低地である。川内川は本県最大の河川であり、延長126km、流域面積1570km<sup>2</sup>の中、山地部は80%、平地部20%を占めている。薩隅地塊は北から安良岳（604m）、国見岳（649m）、中の岳（654m）、烏帽子岳（703m）、真黒岳（407m）がならび、その中には外輪山に囲まれた一種のカルデラ型の湖沼・藪牟田池（海拔295m、水深3m）がある。八重山山塊は花尾山（540m）、雄岳（436m）、八重山（677m）、重平山（523m）、冠岳（516m）笠山（342m）などからなり、この山塊の北側に川内盆地が広がる。

両生類・爬虫類はそれぞれの習性から森林、平野部や耕作地、湖沼、河川などの環境を選び、それに適応しながら生きている。

両生類・爬虫類の中で北薩地区だけに生息するというような固有の種はないが、環境庁の編纂した「レッドデータブック」（日本の絶滅のおそれのある野生生物）の掲載種（希少種）で両生類のベッコウサンショウウオが生息するほか、出水平野を南限とするカスミサンショウウオも注目される。

今回の調査対象市町村は、北薩地区の出水市、高尾野町、野田町、阿久根市、大口市、菱刈町、吉松町、栗野町、牧園町、薩摩町、鶴田町、宮之城町、祁答院町、入来町、樋脇町、東郷町、川内市、東町、長島町、里村、上甕村、鹿島村、下甕村の4市15町4村である。

### (1) 両生類・爬虫類相の概説

日本の両生類・爬虫類の分布状況は哺乳類と似ているが、移動能力や環境適応に限界があり、地域を限って生息・分布する種も多い。

両生類・爬虫類はあまり目立たない存在であるが、近年、急速に進んでいる開発や環境破壊の進行状況をつかむ目的の「環境アセスメント」調査など行うときの指標動物として重要な生物であり、重要視されている。

今回は分類段階の目のグループごとに、既存の関係資料と文献を参考にし、一部に著者の知見を加え鹿児島県の北薩地区の両生類・爬虫類相について概説する。

#### ① サンショウウオ目

カスミサンショウウオは出水平野において1986年に出水市在住の内村嘉徳氏によって、鹿児島県で初めて確認された。その後、畑田健治・石作義盛両氏（1988年）が調査を行い、鹿児島県立博物館研究報告で報告している。この時点までは、出水平野の高尾野町の内野々下・千間山・浦の三地区で成体や卵のうが確認されている。著者らは1994年の本調査で、これまでに生息が確認されている地域の確認調査と、更に調査地を広げて秋期と産卵期である冬期の二回にわけ、生息確認調査を実施し、新しい生息地として確認した場所（野田町下餅井で成体1頭、同町岩元で卵

囊を採取した。)を図に示した。

ブチサンショウウオは山地溪流型のサンショウウオで、森田忠義・石作義盛両氏の調査によれば、本種の北薩地区における生息地は川内川に注ぐ支流で、市山上流の間根ヶ平、元小屋。十曾川の奥十曾、北平、平川の木地山源流の泉水平、石井川の五女木、小川内、羽月川の白木、田代の山岳地、紫尾山系では紫尾山、大川内、鶴田ダムサイトの溪谷をあげている。

ベッコウサンショウウオの分布は九州山脈の中央山地、熊本と宮崎の県境の地で五ヶ瀬川上流の高千穂峡と熊本県蘇陽町馬見ヶ原が唯一の山地として知られている。森田忠義氏は大口市の布計の近くの泉水平、十曾川の上流の奥十曾で、石作義盛氏は黒園山で成体もしくは卵のうを確認している。筆者も1988年から現在(1994年)まで泉水平の個体群の観察を行っているが、安定した状態を保っているようである。このベッコウサンショウウオは「レッドデータブック」の希少種に区分されている。アカハライモリは北薩地区の全域の山間部の湧水地や小川に見られるが、最近では農業などの害のおよばない地区だけにわずかに生息している。

## ② カエル目

北薩地区でみられるカエル類にはニホンヒキガエル、アマガエル、ニホンアカガエル、ヤマアカガエル、トノサマガエル、ウシガエル、ツチガエル、ヌマガエル、シュレーゲルアオガエルそしてカジガエルがある。カエル類はごく一般的な動物であるが、いずれの種も水辺をたよりに生きている、生息環境は多少の差異がある。

## (2) 爬虫類の概説

### ① カメ目

淡水産の亀のイシガメは川内川などの主要河川、池、溪流でみられ、幼体はゼニガメともいわれる。クサガメも生息していることになっているが、著者らの調査では捕獲がないため、更に長期間にわたる生息調査が必要と思える。スッポンは川内川やその他の主要河川でかなり多くみられる。

アカウミガメは背甲1mにおよぶ大型の海亀で、北薩地区の阿久根市、川内市、串木野市などの自然の渚のある海岸で、5月～8月のあいだに産卵・孵化が見られる。このアカウミガメは「レッドデータブック」の希少種になっている。

### ② トカゲ目トカゲ亜目

北薩地区でみられるトカゲ類はニホンヤモリ、ニホンカナヘビ、ニホントカゲの三種であり、広い範囲で分布している。

### ③ トカゲ目ヘビ亜目

北薩地区でみられるヘビ類はアオダイショウ、シマヘビ、ジムグリ、シロマダラ、ヒバカリ、ヤマカガシ、ニホンマムシが知られている。アオダイショウ、シマヘビ、ニホンマムシ、ヤマカガシは最も人目につきやすい一般的なヘビである。ジムグリ、シロマダラ、ヒバカリはやや少ないようである。

このほかにタカチホヘビも生息していると思われる。筆者らの1993年の鶴田ダムでの調査で死体のタカチホヘビを確認した。本種は生息する環境が山中の朽木の中や石の下などであり、人目につきにくいこともあり報告が少ない。

(執筆者 鯨島正道)



出水平野におけるカミサンショウウオの新しい生息分布



## 10 北薩の貝類相

### (1) 北薩地域の海の貝

北薩地域の海岸線は八代海に面した出水市、高尾野町、東町を除いてほとんど東支那海に面し、黒潮の影響を強く受け生息する貝も暖流系のものが多い。

#### ① 川内市西方海岸

人形岩付近にはムラサキインコやケガキが群生しており、タマキビやアラレタマキビ、メクラガイ、スソカケガイ、イボニシなどが多数見られる。ムラサキインコは足糸（二枚貝が岩に付くための糸の束）で岩に着生しているが、岩からはがしてみると足糸に3mm大の淡紫色のチリハギ（二枚貝）が多数、これ又、足糸でくっついている。岩に付いたケガキの死んだ殻をはがして見るとその下にはセミアサリ（二枚貝）の幼貝が生息していて、隠れた狭い所にも大切な貝の生活の場があることを改めて確認した。打ち上げ貝はバカガイ、マガキ、ベニガイ、ミノガイ、オキアサリ、ムラサキイガイ、クジャクガイ、ヒバリモドキ、マドラチゴトリ、シボリザクラ、ニシムラザクラ、キュウシュウナミノコ、ヒメカノコアサリ、シマワスレ、サルボウ、ハマグリ、などの二枚貝の外、ウノアシ、ムギガイ、アワブネ、ウズイチモンジ、キクコザラ、カラマツガイ、ヒメヨウラク、などの巻貝が多数採れた。

#### ② 阿久根市牛之浜

岩や小石の多い海岸でマツバガイ、ヨメガカサなどのカサガイ類がまず目につく。巻貝ではアキガイ科のイボニシ、ヒメヨウラク、シマレイシダマシ、ウネレイシダマシやニシキウズ科のアナアキウズ、コシタカガンガラ、イシダタミ、ウズイチモンジ、クマノコガイ、クボガイ、リュウテンサザエ科のウラウズガイ、コシタカサザエ、スガイ、タカラガイ科のコモンダカラ、チャイロキヌタ、ハナマルユキ、ハナピラダカラ、カノコダカラ、メダカラ、ナツメモドキ、波しぶきのあたる岩にはタマキビ科のアラレタマキビ、二枚貝ではアコヤガイ、ハナエガイ、ヒメイナミガイ、クジャクガイ、コベルトフネガイなどが産し、巻貝の方が種類も生息数も断然多い。

#### ③ 阿久根市脇本

夏は海水浴場で賑わう所である。打ち上げ貝としてよく見られる貝はハマグリ、バカガイ、マルヒナガイ、ヒバリモドキ、カリガネエガイ、クジャクガイ、キヌザル、コシロガイ、ヒメカノコアサリ、タマエガイ、ダンダラマテ、チゴトリ、キュウシュウナミノコ、ニシムラザクラ、ヤエウメ、ベニバト、トゲヤマザキスエモノなどの二枚貝やカニモリガイ、メダカラ、キサゴ、ヒメイシダミアマオブネ、コマキアゲエビス、トウガタカニモリ、エビスガイなどの巻貝が採れる。

#### ④ 長島町明神ヶ浜

小さな砂浜もあるが岩場が多い。巻貝の中で最も多いのはニシキウズ科でギンタカハマ、ヒメクボガイ、クロツケガイ、クビレクロツケ、クマノコガイ、クボガイ、テツイロナツモモ、アシヤガイ、ウズイチモンジ、エビスガイ、コマキアゲエビス、コシタカガンガラ、キサゴ、イボニシ、ナツモモなどがあり、次に多いのはタカラガイ科でハナマルユキ、ナツメモドキ、ヤクシマダカラ、カモンダカラ、メダカラ、サメダカラ、チャイロキヌタなどである。二枚貝ではイシマテ、カキツバタ、ヒメアサリ、ノコギリガキ、クジャクガイ、ヒバリガイ、キンチャクガイ、カ

リガネエガイ、シロアオリ、シワサメザラモドキ、コシロガイ、チリボタン、ケイトウガイ、ナミマガシワなどがあり、岩に足糸で固着する種類が大部分である。

#### ⑤ 長島町蔵之元

採集した所は蔵之元港付近で深い入江になっている。岩にくっついているカサガイ類のコウダカアオガイ、マツバガイ、ウノアシ、ヒメコザラ、タマキビ類などではタマキビ、アラレタマキビ、ヒメウズラタマキビ、二枚貝ではカリガネエガイ、ケガキ、マガキなど岩に固着性の種類が大部分で巻貝、二枚貝共に内湾に生息する貝ばかりである。

#### ⑥ 獅子島

▲ 片側港…片側港は島の南側に位置し、港の西側に砂利ばかりの小さな浜がある。打ち上げの死貝ばかりであったが、104種ほど採集した。潮間帯で得られないものとしてオニサザエ、アラレガイ、ミミズガイ、ヨフバイ、ツメタガイ、クチグロキヌタ、クダボラ、チヂワサンゴヤドリ、タジマニシキ、マルミミエガイ、シャジククダマキ、キジビキガイ、フデガイ、モグラノテ、オニカゴメ、カバトゲウミギクなどが採れた。チヂワサンゴヤドリは希産種で文献には土佐沖と南支那海に分布するとある。

▲ 御所浦港…港に置かれた蛸壺の中からクチグロキヌタ、ハナムシロ、スナゴスエモノ、オニカゴメなど深い所に生息する貝が採取された。

▲ 平河内…エガイ、イボニシ、クリフレイシ、トマヤガイ、タマキビ、クチバガイ、アラムシロなど内湾性の強い種類が多い。

#### ⑦ 出水市名護浦港

この港はケタウタセ船によるクルマエビ漁の根拠地である。漁場は八代海、ツメタガイ、ヒメツメタ、ハナツメタ、オオタマツバキ、ウチヤマタマツバキ、フタスジタマガイ、ヒロトラダマ、ヒョウダマ、ゴマフダマ、エゾタマガイ、ネコガイなどのタマガイ科の貝が断然多い。その外、アクキガイ科のヒメホネガイ、オニカゴメ、オリイレヨフバイ科のカニノテムシロ、キンシバイ、ハナムシロ、キイヨフバイ、アラレガイ、クダマキガイ科のイボヒメノシャジク、モミジボラ、マダラクダマキ、イトカケガイ科のオオイトカケなどの希産種が産出する。

### (2) 北薩地域の陸・淡水の貝

北薩地域にすんでいる貝を文献で調べてみると、陸貝が約50種、池や川などの淡水の貝が約5種類である。陸貝は神社や寺院などの樹木の生い茂った所に多い。北薩地域でどこでも容易に採集できるのはヤマタニシ科のヤマタニシ、ヤマクルマ、アズキガイ科のアズキガイ、オナジマイ科のウスカワマイマイ、ツクシマイマイなどである。野菜を食い荒らすのはウスカワマイマイである。淡水貝でどこでも見られるものにはカワニナ科のカワニナ、アマオブネ科のイシマキがある。陸貝は海を渡って移動することができないので本土から遠く離れた島では独特の進化を遂げ、特産種（その島にだけ住んでいる種類）を生み出すことが多い。

### (3) 北薩地域を模式産地とする貝

貝に限らず生物の新種発表がなされる時、記載の対象として用いられた標本を模式標本と呼び、その標本が採れた所を模式産地と呼ぶ。

① 海産…次の8種の中、阿久根市海岸が3種、残り5種は甌島近海が模式産地である。

1 クサイロアオガイ 模式産地：阿久根市 分布：山形県以南、南西諸島、朝鮮半島

- 2 カスリアオガイ 模式産地：阿久根市 分布：山形県以南，南西諸島，朝鮮半島
  - 3 ホソスジアオガイ 模式産地：阿久根市 分布：山形県以南，南西諸島，朝鮮半島
  - 4 コシキバイ 模式産地：甌島沖（400m） 分布：九州西岸，土佐湾？
  - 5 カサゴナカセ 模式産地：甌島沖（300m） 分布：甌島沖，屋久島沖
  - 6 オキナスイフガイ 模式産地：甌島列島沖 分布：甌島列島沖，枕崎沖
  - 7 コシキワタゾコダコ 模式産地：甌島付近（260m） 分布：同
  - 8 マルカワツノ 模式産地：甌島沖（200m） 分布：土佐沖～九州西岸沖
- ② 陸産…次の8種の中、栗野岳1種，上甌島1種，残り6種はすべて下甌島が模式産地である。

- 1 ハンミガキゴマガイ 模式産地：上甌島 分布：同
- 2 コシキジマギセル 模式産地：下甌島 分布：上甌島，中甌島，下甌島
- 3 アズマギセル 模式産地：下甌島 分布：上甌島，下甌島
- 4 ナタマメギセル 模式産地：下甌島 分布：同
- 5 ナンピギセル 模式産地：栗野岳 分布：熊本県（市房山，京丈山）  
宮崎県（国見岳），大分県（祖母山）
- 6 コシキオオヒラベッコウ 模式産地：下甌島 分布：上甌島，中甌島，下甌島
- 7 コシキコウベマイマイ 模式産地：下甌島 分布：上甌島，中甌島，下甌島
- 8 コシキフリイデルマイマイ 模式産地：下甌島 分布：上甌島，中甌島，下甌島

#### (4) 甌島の特産種

▽ 甌島…コシキジマギセル，コシキオオヒラベッコウ，コシキコウベマイマイ，コシキフリイデルマイマイ，アズマギセル，コシキワタゾコダコ

〔アズマギセルは中甌島からの報告はない。コシキワタゾコダコは甌島付近。〕

▽ 上甌島…ハンミガキゴマガイ

▽ 下甌島…ナタマメギセル

上島励氏は VENUS 第52巻第4号で，ナタマメギセルを貝殻の大きさ，殻口の形，交尾囊の盲管の長さ，陰茎の形の違いによって [北部大型]，[南部大型]，[小型] の3型に区別し，[北部大型] と [南部大型] はそれぞれ下甌島の北部と南部に広く分布するが，[小型] は瀬尾崎の先端にしかないと述べている。(P160写真)

(執筆者 行田義三)